- 討 議 -

基本法、平和憲法などを意味しています。 未来社会のビジョンを描く際、自分たちの 家財道具を点検して、何を棄て、何を守る べきかは日本人の見識を問われています。 ただ一つ注文を付け加えますと、現在の日 本とアジア近隣との関係を考えると、私た ちはまだ真の意味の「戦後」を迎えていま もはまだ真の意味の「戦後」を迎えていま せん。他人にとやかくいわれる前に、日本 人自らの手によって、あの戦争の点検と総 括をしてもらいたい。日中の歴史的和解を 真に望む者の一人として、そう願っていま す。

(了)

議長(清水) 劉先生、ありがとうございました。終戦直後は随分日本人も反省いたしまして、例えば文学の分野ですと、こういうふうになったというのは近代的自我というものが弱かったからだと。そういうことが強調されたのですが、これは弊害もあったわけですけれども、やはり非常に大事なことだと思うんです、主体性論とかですね。ところが、いつの間にかそういったものが風化してしまって今の状況になってしまって、うやむやに流されてきたような感じがいたします。

そういう中で、戦争を通して反骨の精神 を抱き続けた知識人のお話だったかと思い ます。またこういったような問題が新しく 復活していくことを願っております。

それでは、次に稲賀さんのお話ですが、これは武道についてのお話だそうです。稲賀さんは武道をやられるんですが、本当は美術史が専攻でいらっしゃる。特にフランスの印象派などに対して非常に綿密な研究をなさっている。これはフランスの土壌で、フランスの土地でいろいろ当時の新聞を調べたりして、ある意味では足でもって書いたようなものでありまして、大変大きな評価を得ておるわけです。

それでは稲賀先生、お願いします。

[発表4]

お稽古ごとの海外文化交流: 武術の場合を中心に



稲 賀 繁 美 (日本・国際 日本文化研究 センター教授)

実は一昨日、アメリカ合衆国から戻りました。1年間向こうに行っておりまして、 久しぶりに日本を見ると、わからないこと がたくさんあって、まだ戸惑っている状態 です。

今回の「日本の文化と心」ですが、最初にお話を戴いた段階では、心の「行方」という言葉が、題名の最後についていたかと思います。今からの「心の行方」をどうしていかなくてはいけないのか、というのが一つの我々の課題ではないか。そして、ユネスコに縁があるこの協会においても、これは皆様がずっと考えていらっしゃることではないか、と思いました。

そして、その場合にも、一部のエリート、特権的な文化人だけが偉そうな顔をして、こうした事業に参画しているという時代は、もうはるか彼方に、過去に遠ざかってしまっています。今はむしろ我々普通ごく一般の「市民」という言い方は、日本ではいまだに違和感もありますが、我々一人ひとりが何をしていくべきなのか。その反省から始める必要があるだろう。そうしてみますと、お稽古ごとというのは、我々が外国に行った場合に、一番身近に外国の人たち、

異文化の人たちと接するときの接点となる ものですね。ところが、このお稽古事をど う扱えばよいのかということについて、あ まりきちんとした議論はされていない、と いうのが私の印象です。

お稽古事から外国との接点を見る

今日は武術・武道のことに限定してお話 をさせていただきたいと思います。最初に 幾つかの例から始めたいと思います。25年 ほど前に、パリにおりました頃、松涛会と いうところの空手の先生を30年近くやって いらっしゃる日本人の師範の方から伺った 話です。その先生はモロッコのラバトにい らっしゃったのですが、そこで、いつもの ように、畳が敷かれている道場の正面に向 かって礼をしようとすると、ラバトの学生 たちが「僕たちはできない」と言い出した。 理由はおわかりですね。イスラームの人た ちにとって、メッカの方向に向かって、な いしはミハラブに向かって礼拝をすること はできますが、それ以外の対象に対して自 分たちが頭をぬかづくということは教えに 反する。

空手であれ、柔道、剣道でも構いませんが、道場で神棚に向かって一礼をする、ないし二礼をする。これは別に宗教的な信条の如何にかかわらず、日本では比較的当たり前に社会慣習として受け入れられています。けれども、これ一つとっても、例えばイスラーム圏に参るとなると、そのままいのか。相手側の文化、そして宗教に対する配慮がなければ、国際交流はうまくいかな配慮がなければ、国際交流はうまくいかな配慮がなければ、国際交流はうまくいかない。そうしたお題目は誰だって分かってはいるのですが、稽古の前の礼儀作法一つでけばよいのか、これという万国共通の解決を見出したわけではありません。

二つ目の例。私は合気道を若干やってお

ります。例えば韓国でも、明知大学といえば、これは日本の日本体育大学に匹敵する大学で、オリンピックに出場するような選手をたくさん養成している大変優秀な体育系の学校です。そこなどに招かれますと、道場で合気道をやっていらっしゃる。ただ、向こうの道場は土足です。運動靴を履いての稽古もあります。日本ですと、まず畳を掃き清めて、その上で裸足になって、というのがごく当たり前ですが、お隣の儒教国である韓国で、既にこれは通用しない。

言ってみれば韓国というのは靴の文化、中国でも一緒ですね。そうしてみると、逆に外国へ出て初めて、日本の武道で我々が当たり前だと思っていることが、実は日本の狭い列島の中でしか通用しない一つの習慣であるということもわかってきます。そして、こうした事態は割と簡単に政治問題と結びつきます。

三つ目にその例を挙げます。これは1977 年、今から30年ほど前になりますが、韓国 ではこういう議論がありました。韓国では 剣道が大変盛んです。今、国際的な剣道試 合をいたしますと、下手すると日本が負け てしまう、というぐらい韓国では剣道が盛 んです。その韓国で、袴をはくのはおかし い、という意見が出始めた。

袴というのは、あくまでも「古典的偏狭なる日本美の象徴」であり、剣道というものが本当に国際的な剣道になるためには、我々韓国人は袴などはくのはおかしい、とそのように主張する方が出てきて、韓国の道界で大変大きな議論になりました。袴ではなくてパジというものですけれども、そういう自分たちの民族に根ざした衣装をつけてこそ、初めて剣道という主張が建議としてなされるということもありました。

柔道などを嗜んでおられる皆さんは、似 たような例をたくさん思い出されると思い ます。国際柔道連盟は1951年にできましたが、そこで試合のルールが大きく変えられました。例えば今日では、オリンピックに「有効」とか「効果」といった規準が取り入れられていますが、これは1973年の制定です。また段の認定に関しても、今では国際柔道連盟による段の認定ということがあって、日本の柔道連盟との間には、さらに、オリンピックの試合を見ていると、ブルーの柔道着が登場しますが、これにはもちろん日本柔道連盟は導入に反対した。けれざも、押し切られて1997年には国際的に導入されるに至っている。

つまり、一言で言うと、国際化していこう、日本の文化を外に伝えていこう、という時には、その主体であり、言ってみれば宗主国のつもりだった日本側の関係者の意思は、必ずしもそのままでは通らない。そうした外交的な文化摩擦があちらこちらで起こっている。

国際化と文化摩擦

ここからが問題なのですが、そうした場合に一体どう振る舞うべきなのでしょう。ここで対応を間違えると、国際文化振興なり、「日本の形」としての「心」を伝えるという任務も、うまく達成することはでると、いわば日本による文化帝国主義の侵略だ、といった話にすらなりかねない。ちょとさい言い方に聞こえますが、これでも中国の北京などに行きますと、いまでも中国の北京などに行きますと、いまでもずにそうした議論を吹っかけられて、どう防戦すればいいのかと、悩む折節もごさいます。そのあたりのことを少し考えてみたい、というのが今日の話題でございます。

そこで、次に問題になるのは、そうした 外国とのお付き合いのなかで文化摩擦を体 験し、受け入れ側のいろいろな事情に対処 する場合に、日本側は一体どういう姿勢を とればいいのだろう、ということになると 思います。その一つの例といいますか、よ くありがちなことを、ご参考までに、手短 にお話しします。

これはハンガリーで20年近く剣道を教えていらっしゃった阿部哲也さんという方から直接お伺いしたことです。剣道の場合ですと、日本人の範士のほうが強い間はいいのです。試合をやっても日本人が勝っていれば、皆すなおに言うことを聴いてくれる。ところが、やがて向こうに実力者があらわれる。そうした例は東欧などに行かれてご存じの方もいらっしゃるかと存じます、体力では日本人が負けてしまうことは、非常に多いわけですね。

向こうの人たちのほうに実力者が出てき しまうと、日本の権威が揺らぎ始めてしまう。そうするとどうなるか。よくあることは、それまでは「勝つほうが上だ」「強い剣道を目指せばいい」と言っていり剣道」であるとか、「精神的に優位である剣道」というようなものが、にわかに登場することになる。その理由はとてもよくわかりまいたなくてはいけない、たれなくてはいけないんだ、精神を伝えたいんだと。それは痛いほどわかるのですが、どうも外から見ていると、負け犬の遠吠えみたいに見えてしまう、というのが阿部師範の苦悩だったわけです。

それからもう一つ困ってしまうことは、 そうした精神論を日本の先生方が言い始めても、向こうではこれがなかなか理解してもらえない。要するに技術的にどうしなさいということがきちんと説明できないものだから、あいまいな精神論に逃げ込んでしまう。とかくこうした傾向が日本から派遣された先生方にはあるということを、阿部さんは自分の反省として言っていらっしゃ いました。これは我々も、ひとりひとり自 分の胸に手を当ててみると、他人ごとでは ない、「自分もそうしているな」と思わな いわけにはゆかないところでしょう。

これと似たような事例をもう一つ、一般 論で申しますと、例えば海外で日本語を教 えるという場合にも、一部の先生方は本当 に現場で苦労していらっしゃいます。例え ば日本語の敬語を教えようとすると、それ は言ってみれば日本社会の上下関係という ものを相手側に押しつけることになります。 それから男言葉と女言葉とで、敬語もまた 違ってきます。女性の先生に習った男性が 女性語を身につけてしまう、といった不都 合が発生する。となると、はたしてそうし た日本の価値観まで外国人学習者に押しつ ける必要があるのか。それともそうでない 日本語教育というものを海外では目指すべ きなのか。これについても実はさまざまに 意見が分かれています。ひとつ武道やお稽 古事には限らず、こうした問題が、いろい ろなところで発生しているのですが、なぜ か、そうした問題をまとめてきちんと議論 することは、必ずしも頻繁にはなされてい ないような気がいたします。そうした問題 提起につながる例を幾つか申しあげました。

お稽古ごとの大衆化・国際化

それから大きな第2番目の問題として、 稽古ごと一般に関わることを一つ申し上げ たいと思います。なぜ先に申したような問 題が起こるかといえば、それは一つには、 そうしたお稽古ごとが人気を集め、海外に まで広まり出したからに他なりません。つ まり、島国・日本の文化が、国際的に大衆 化してしまった。大衆化すると何が起こる か。大体二ののことが起こります。

一つは本当に実力のある指導者が払底してしまいます。あっちにも行かなくてはいけない、こっちでも教えなくてはいけない、

で人手が足りなくなってしまう。ところが 受講者は増える一方で猫の手も借りたくな る。そうしたときに何が起こるかというと、 大体は瑣末な規則、例えばこれは右手でこ うするのが流儀であるとか、それはきちん と定められた技とは違っているから、反則 負けだといった、小うるさい規則がたくさんはびこりはじめます。こうした現象は、 だいたいにおいて、真に実力のある指導者 がいない、そして受講者が増え過ぎたとい う場合に起こります。

そして悪いことに、今申しました二つのことは、得てして両方一緒に発生する。受講者が増えてしまったから指導者が足りなくなる。足りなくなるからお粗末な指導をしてしまう。これはどこの世界のお稽古ごとでもあることで、そのことについても我々は、少しまじめに考えておく必要があると思います。おしゃべりばかりの教室は、堕落していることが多いものです。

加えてもう一つ、それが海外に行った場合にどうなるか。今日も何度かお話に出ましたように、日本国内で通用する常識は、一歩外に出たら通用しないことが多い。それについての経験を蓄積して、その上で反省を凝らしてゆくということが、どうしても必要だと思います。そして特に外国では、言語化ということが、ある段階ではとりわけ不可欠な手段になります。

"言語化"の重要性

一番簡単な例を一つ申します。今、武術・武道と言ってきましたけれども、これは英語で言うと martial arts「マーシャル・アーツ」といいますし、ドイツ語で言うと Kriegskunst というわけですね。フランス語では les arts martiaux。そう訳して皆わかっているつもりになっているのですが、これらは本当に等しい価値を持っているものでしょうか。これは翻訳の場合に非常に

頻繁に起こる問題ですが、漢字文化圏で言っている漢字の語源に戻った説明とヨーロッパ語の語源とは、頻繁にずれている。しかし、実用ではプラクティカルに通用するから、それで済ましてしまっている。ところが、後ろにある背景は、大きく違っている。

「武」という字は、皆さんご存じだと思いますが、「弋を止める」と書きます。ですから、これは語源に忠実に言うと、「武器」とどうしても言ってしまいますが、兵器でもって相手をつぶすとか、相手を破壊してやっつけてしまうという意味ではない。むしろ攻撃されたものを止めるというアイディアが、漢字の中には少なくとも含まれているわけです。

それに対して「マーシャル・アーツ」の「マース」といったら、これは何でしょう。 火星ですね。これは軍神マルスというところから来ているわけでありまして、戦いる。 神様であるというのが前提になっている。 そうすると、武術というのを「マーシ、既にそこで重大な誤解が生じているというで表えてしまうというで表えていると、外国で表ましょう。となると、外国で教える方たちは、最初のところで、「武術というのは軍事技術とは意味が違うんだよ」ということを、きちんと一言、言葉を尽いいうことを、きちんと一言、言葉を尽いいうにとない。

翻訳の危険性

ここで、3番目の逸話をつけ加えます。 弓の話です。オイゲン・ヘリゲルという人 がいて、お読みになった方が何人かいらっ しゃるのではないかと思いますが、どうで しょう。『弓と禅』ほか、幾つかの著作が 日本語に訳されていて、今でも岩波文庫に ございます。そして特にドイツ語圏ですと、 今でも和弓をやる人の90%はヘリゲルの本 を読んでいますし、あちらで東洋系の武術 をやる人の統計でいうと60%、70%はヘリゲルを読んで開眼した、ということになる。これはドイツから戦後最初の留学生だった、シュパイデル先生から伺った話です。

へリゲルの本の中で一番有名な逸話に次のような話があります。阿波研造さんという東北のほうの師範ですけれども、彼にへリゲルは弟子入りしたわけですね。そして、神秘体験をしたということになっています。真の弓がもちろんポンと的に当たった。そして2本目を射たらガシャッと変な音がして2本目を射たらガシと、2本目の矢をた。どうなったかというと、2本目の矢をが1本目の矢筈に当たって、1本目の矢を砕いていた。それは真っ暗闇のなかで、的を見えない状態での出来事でした。それは真っながりを見えない状態での出来事でした。それは真っない状態での出来事でした。それは東洋の武術の神秘を見た、という解釈になっています。

ところが最近の説ですと、これは、阿波 先生は失敗をしてしまって、「ああ、し まったな」と内心思っておられたのではな いか、という新説が出てきた。つまり、武 術家にとって自分の武器を壊してしまうと いうことは、これはあまり褒められたこと ではないのですね。こういうこともあるの だよ、という程度の気持ちで見せたのだけ ど、ヘリゲル先生は「ああ、これこそ東洋 の神秘」と思ってしまった。

こうした一種の誤解、文化的な読み間違いみたいなことが、海外への普及の中にはいくつも入ってくる。今、これは言語化されないコミュニケーションの問題を言いましたが、ヘリゲル先生には日本人の、つまり、当時の旧制高等学校のエリートの通訳が何人かついている。この人たちはマイスター・エックハルトなどの神秘主義をヘリゲル先生から習っている。そして通訳をやってくれと言われると、できるだけドイツ人の哲学教師の意向に沿った言葉を選ん

でうまく通訳しようとする。通訳ができてしまうと、結果として阿波研造、日本の師範の言おうとしていたのとは違う、別の世界が生まれてしまう。ところが、それがへリゲル先生にはわからない。こうして一種の神秘化された日本というものができ上がってゆく。しかしながら、そうした事態が発生している、ということに、日本の師もまた、お気づきではないわけですね、言語がわかりませんから、自分の発言がどのように翻訳されているのかは、ご存知ない。

というわけで、言語化が必要だということをさきほど一言言いましたけれども、言語化すればそれでよい、というわけには参らない、どうやって言語化して伝えていくかというところにも、まだ大きな障害が残っている。そして、とかくインテリというか、頭でっかちの人たちはそうしたことに気がついていない。これは私も通訳としての自戒を込めての反省であります。

近代武道と試合形式

以上を踏まえ、最後にもう一つだけお話をして、今日のお話を切り上げたいと思います。

柔道のことに話を持っていきますが、 我々ともすれば、柔道というのは日本文化 の、言ってみれば武術・武道の粋の一つで あると思っている。けれども、多分これは 大間違いだと思います。嘉納治五郎が近代 柔道の父といわれていますが、この近代柔 道というものがどうしてできたかというと 明治16年、西暦1883年に、文部省は剣術と 柔術とを、体操の正科として取り入れるの はふさわしいかどうかという諮問を出しま す。それに対して翌年、医学と教授法の見 地から、どうも柔術はあまり適していない という返答が出てしまう。

嘉納治五郎はこれに対して何とかしなく

てはと思ったのです。そこで、今まであった日本の柔術の中から、近代の教育のために正科として取り入れるのにふさわしい部分だけを残すという改良を加えた。そこで、彼が明治22年に提唱したのが柔道体育法といわれるものでした。この中で、柔術に残っていた関節技などの多くが、排除されてしまいます。それが今のいわゆる試合形式の柔道というものの根元になってゆくわけです。もちろんその裏にさまざまなことがあるのですが、型稽古の形骸化といった点も含め、今日は省略させていただきます。

一つだけ指摘しておきたいのは、こうした潮流のなかで、剣術についても柔道についても、試合形式という練習方法が、その後、日本でも外国でも主流になってゆく、という事実です。この「試合」という形式は、例えば剣道・剣術ですと、千葉周作が幕末から取り入れているのは事実です。竹刀剣道などですね。ただし、ここで蹲居は、労勢から、すぐ打ち合って、というのは、古流の剣術の修行の中の、ほんの一部分にけを極端に肥大化させて、勝ち負けのロジックの中に強引に押し込めた、という点が否定できません。

とすると、どうでしょう。オリンピック 種目に柔道・剣道が入った。これで国際化 が実現された、と思っているわけですが、 実はそこには随分大きな犠牲が伴っている。 そして、それは西洋のスポーツという概念 に当てはまる部分だけをすくい上げる、と いう近代化・西洋化の結果であったと、い うことも言えるわけであります。

「武のこころ」を問い直す

これが、本日の結論につながります。競争原理にのっとって、どちらがどちらに優れているか、どちらが勝つかという形の武道・武術であるならば、私はそうしたものを国際貢献として海外に広めるのに、そん

なに大きな意義はないと思います。むしろ 最初に言いました「弋を止める」という技 術と智恵とを世界に広めていく。そのため に武術が使われるのであれば、そのほうが よほど大きな意味を持つだろう。世界中が 例えば市場原理に支配され、市場競争をし て勝った者がより優れているのだという、 そうした価値観に武術も乗っかってしまっ たのでは、これは日本の心を伝えるという 上で、むしろ百害あって一利なし、であろ うと思います。

今朝、福岡ユネスコの「60年の歩み」のスライドに、ユネスコ憲章の前文、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という言葉がありました。私は、半分は賛成ですが、半分は納得できないところがあります。「砦をつくる」という姿勢、そうした何かを守ろうとする姿勢そのものがおかしいのではないか。

ちょっと話が飛躍しますけれど、むしろ 武術にしても、これは「お手合わせ」なの ですね。人と人とが接触して、そこで相手 がどう動くかということに、どう対応していくか。その人と人との間、間柄をいかに 慈しんで育ててゆくのか、というのいが 武」というものの「こころ」だと思いうす。そうすると、むしろ「砦」などという ものを心につくらない、そうした開かれた ものを心につくらない、そうした開かれた ものをいにつくらない、そうした開かれた ですが、今日、中西先生もそういう意 味で、お話をなさったのではないかと考え る次第です。

というわけで、後は質疑応答のところで、 また少し議論を深めたいと思います。

(了)

議長(清水) ありがとうございました。 稲賀さんのお話は前向きのお話で、大変うれしかったです。私もオイゲン・ヘリゲルなどを読んで感動したんですが、どうも大分つくられた面もあるようで、ちょっとだまされたかなという感じもしております。

実際問題として日本の武道がスポーツと して受け取られるようになってしまうとい う状況の中で、そういった武術・武道に あっては、本来はもっとも核心的な問題で ある元来の心というものはどこかに行って しまうという問題が提起されました。これ はこれからの日本にとっての大きな問題で すね。日本文化を世界に広めようというの は現代日本の大きな課題ですが、その場合 にあらわれてくるのが、稲賀さんの指摘さ れた問題ですね。これはさけて通れない。 これは商業主義というものと、どういうふ うに闘っていくかというような問題にもな るかと思いますが、日本人がもう一回腰を 落として自分の文化を考える時期だと、つ くづく感じた次第であります。

それでは、これで4人の先生方のご発表を終わらせていただきます。このあと、フロアのほうからも、いろいろご質問なりご意見なりを伺いながら、討議を進めさせていただきます。

「FUKUOKA UNESCO」第 44 号 創立60年記念国際文化セミナー 特集号 日本の文化と心

2008年9月編集発行 福**岡**ユネスコ協会

〒 810-0022 福岡市中央区薬院2丁目4-5-702号 THE FUKUOKA UNESCO ASSOCIATION 702, 4-5,2-CHOME YAKUIN, CHUO-KU FUKUOKA, 810-0022, JAPAN

> TEL 092-715-8768 FAX 092-733-1291

印刷 福岡印刷株式会社